

●蜘蛛の採集及保存法 以下述べんと欲する處

は分類に供すべき標本の採集及び保存法にして組織、解剖等の目的には他の方法に依らざるべからず、蜘蛛類の採集は至つて簡單にして特別の器具を要せず唯可成口の廣きガラス瓶に紐を付けて手に提げ得る様になし是れに七〇パーセントの酒精を入れば足る、此外に小形のピンセットを要す先づ車輪狀の巢を作る普通の蜘蛛を採集するには動物の居る下方に瓶の口を當てがひ上より手にて巢に觸る時はクモは自ら酒精中に落ち込むものなりかくする時は足の取れる等の憂なし樹上高き處に棲息するものは棒にて巢と共に搦め取るをよとす、蜘蛛類には以上述べし如く車輪狀の巢を作るものも甚だ多けれども又濕地の落ち葉の下、石の下、木の根本、又は草間などに生活するものにて車輪狀の巢を作らざる種類も甚だ多く却て研究には興味あるものなり、これ種類の變化に富むが故なり、かゝる種類は概ね其體小にして長さ數ミ、メ、のもの多し、甚だしきものは肉眼にて辛じて見出し得るものあり、又此等は普通幼きものの如く考へ採集せざる人あれどもこれ決して幼きものに非ず、斯かる種類の採集には前述べし如く木の根石の下などをピンセットにて掘り極めて注意して搜索するを要す。

凡て斯くの如くして採集したる動物は何れも七〇パーセントの酒精中に投入して持ち歸り次に九〇パーセントの酒精に入れて永く保存することを得、酒精にて保存し

たる標本は年と共に多少變色し又柔かきものは縮む不便あれども分類學上には少しも差支なきが如し、フォルマリンの四パーセント位の溶液は色を保存するに於ては酒精にまさる處あるも關節を堅くし随つて毀損し易く又研究に不便なり、猶フオルマリン液は組織を膨脹せしめ腹部を破裂せしむることありて良しからず、其他種々の液を作り試みたるも格別に成功したるものなし。

以上の外内臓、筋肉等を除き外部のキチン質のみを残して顯微鏡的のプレパラートを製する方法あり、是は蜘蛛に限らずキチン質の外皮を有するもの例へばムカデの如きものに應用して好結果を得るものなり、其大要を左に附記せん、先づ新らしき標品又は保存しあるものを取り出して苛性加里の水溶液（濃度は一定せず）に入れ置くなりかくして二三日の後又は一週間位の後に内部の諸機關の悉く溶解し去りて外部キチンのみを残すに至り、これを取り出して水にて能く洗ひ次に酒精にて次第に水を抜き去り遂にバルサムにて封するなり、かくして作りたる標本は足の爪、觸肢の形狀等凡て外部の研究には最も便利にして缺くべからざるものなり。（奥村多忠）

●日本のヒミズモグラ類 ヒミズモグラは一名

ヤマモグラと稱し *Talpa* に屬す、モグラに似たりと雖も形甚小、且つ前足の發達彼れの如く甚しからずアンダーソン氏に従へはミ、ズの外植物の幼根を食すと云ふ、

(雜錄) ○「エトピリカ」一萬餘疋、○家畜として馬の古さ

余は一昨秋房州清澄山農科大學演習林内官舎石垣に於て小捕鼠器を以て日々數頭の *hondonis* を得たり、依つて其或者に就て食物を驗せしにミ、ズを食し居るは分明なりしも其他のものに至りては知らず果して幼根を食し本科中の一異例とす可きか。本邦産として知られしもの左の如し。

I 下顎に犬齒を缺く……………*Urotricus*.

A 尾比較的長し(平均三三ミ、メ)。

(a) 形大、頭胴の和九〇—一〇一ミ、メ、毛色暗褐色。

九州、ヒミズモグラヤマモグラ……………*U. talpoides* TEMM.

(b) 形小、頭胴の和八四—九一ミ、メ、毛色淡褐色。

對馬……………*U. t. adversus* THOS.

(B) 尾比較的短し。

(c) 毛色褐色、尾長平均二〇ミ、メ、

四國……………*U. t. centralis* THOS.

(d) 毛色灰黑色、尾長平均二七ミ、メ、

本州……………*U. t. hondonis* THOS.

(II) 上下兩顎に犬齒を有す……………*Dymecodon*

(e) 外觀 *hondonis* に似たり、尾毛特に短し、時に

hondonis の若きものと誤ることありともある可し。

本州北部、ヒメヒミズモグラ(新稱)

羽前、八ヶ嶽……………*D. pilirostris* TRUE.

(余は羽前國藏王山に於て得たる標本を以て之れに同定し得可しと信ず。)(青木文一郎)

●「エトピリカ」一萬餘疋(何にもなるまい)

札幌なる八田博士より波江氏宛の通信のうちに下の如き一文あり、曰く「小樽の漁家某千島の某所に此の夏出漁中不漁の爲手當り次第に「エトピリカ」を捕へ鹽漬とし持ち歸りたる趣、勿驚其の數一萬參千餘疋、何かになるまいかと云て居るが何にもなり相にも御座なく候、一奇聞に付一寸申上候。」(大島廣)

●家畜として馬の古さ 別に新しい事實でも無いが誰も一寸考へる問題であるから少しく書いて見よう。馬が家畜とせられたのは有史以前である事は誰も疑ひをいれぬ事である。然らば現今この位古くから家畜とせられて居た事が分かつて居るか云ふに、佛國のドルドーニエ(Dordogne)地方の洞人(cave men)の遺跡中に馴鹿の角に丸彫りした嘶いて居る馬の頭が発見せられた、のみならず他の骨片に施された平彫を見ると充分に頭部を革紐で綾取り手綱を付け猶鼻革の具合から考へると馬銜まで爲た事が分る。同時にある洞の内から非常に多くの料理せられた馬の骨が見出された。して見ると洞人は又馬肉を珍重して食つたのであらう。

斯くの如くして馬の遺跡は上部洪積層の馴鹿期(epoch of the reindeer)から現れた、實に人類學者の所謂舊石